

### Ⅲ 研究活動報告——会報『21世紀』を軸に

当研究においては、ホームページ (<http://www.bcomp.metro-u.ac.jp/modernism/>) を開設したほか、会報『21世紀』を刊行して研究活動の相互連絡と外部への発信に努めた。この会報は、当研究グループ（モダニズム研究会）の機関誌として1997年から刊行されている。

以下、会報『21世紀』の主な内容について掲げる。

#### 『21世紀』第1号

1997年2月発行（編集：大平具彦）

#### （目次）

##### ■投稿

- |    |       |                                 |
|----|-------|---------------------------------|
| 2  | 稲賀 繁美 | “ポスト・コロニアル”の周辺                  |
| 4  | 三宅 昭良 | モダニズム/ファシズム/オカルティズム——三題断のおはなし   |
| 6  | 大平 具彦 | 20世紀の始まり方と終わり方——ツァラ生誕百年記念祭に参加して |
| 12 | 坂田 幸子 | ウルトライスマに再挑戦                     |
| 13 | 和田 忠彦 | カルヴィーノを辿りながら                    |
| 14 | 木村 榮一 | ボルヘスの迷路へと                       |

##### ■奥野路介氏追悼

- |    |       |          |
|----|-------|----------|
| 16 | 和田 忠彦 | 奥野さんを偲んで |
| 17 | 木村 榮一 | 奥野氏を偲ぶ   |

##### ■編集後記

（主な内容の紹介）

##### ■投稿

#### “ポスト・コロニアル”の周辺

稲賀 繁美

6月にパリで開催された「ポスト・コロニアリズム」をめぐる会合に飛び入りで参加した。主催者はアフリカ・オセアニア美術館館長のジャン＝ユベール・マルタンとチュニジア出身の作家アブデルワハブ・メッデブ。エドゥワール・グリッサンやタハール・ベン＝シェルン、モハメド・ディーブにダリュエシ・シャイガン、フランス語圏の主要なアラブ、イスラーム、ペルシアの作家たちだけでなく、ガヤトラ・スピバックや美術史家でアフリカ現代美術の権威ロバート・ハリス・トンプソンといった参加者も得た、国際的な、しかしパリではごく普通の、とりたてて鳴り物入りでもない会合だった。日本からも西谷修、鶴飼哲といった有力な参加者を得たのは喜ばしくも心強いことであった。学会そのものについては別途報告するむね予定もあるのでここでは省かせていただき、この会合の背景をなすひとつの活動についていささか広告がてら、皆様のご協力をあおぐべく宣伝申し上げる。

思えばアブデルワハブ・メッデブとのつきあいはもうかれこれ5年を越える。サンチャゴ・デ・コンポステラでひらかれた相互人類学で同席したのが1991年。その前の年のユネスコの招きによるフィレンツェでの「東のしるし、西のしるし」の席にもふたりして顔を並べていたはずだが、これは互いに記憶なし。イスラエルの彫刻家ダニ・カラヴァンに言及していたことで互いに後になって互いの存在に気がついた。サンチャゴでは湾岸戦争に対する日本での反応を尋ねられて、全く無関心に等しく対岸の火事的な反応に終始していた多くの日本マスコミのあり方に鋭い疑問をつきつけられた記憶も生々しい。

その後の記憶もやや混乱している。チュニジアのハマメットで「諸宗教の対話」が組織されたのに出席したのが1993年だったか。日常の会話では話に花が咲くのに、彼の主宰する学会というとなぜか公の席での発議に失敗するという妙なジンクスのつきはじめである。その折りには、フェティ・ベンスラマと協力して企画していた『アンテル・シーニュ』への寄稿を求められたかと記憶するが、結局この会合の記録を中心とする論考は1995年に創刊された『デダル』誌1-2号にまとめて掲載された。ダリオ・アガンベン、クリステイヌ、ビュシー・グリユクスマンといったそうそうたる寄稿者のあった特集号は「神的なるものの表象の背理」との副題を背負っていたが、これに掲載された拙論「五十嵐一」は編者を通じてサルマーン・ラシュデイ氏にも届けられ、地下生活のつづく作家はその英訳公刊も希んでいるとつたえられた（実際には英文の方を先に執筆しており、これは *International Communication and Mutual Understanding* として Chicago 大学より出版された会議報告（1992年開催、1995年発刊）で既に活字にしていたのだが）。ちなみにいまだにイスラーム学者の間で五十嵐一という存在が白眼視されている日本では、同稿和訳要約版（『東西の思想闘争』中央公論社、小堀桂一郎編所収）も、ほとんど反応を得ていない。

1996年『デダル』3-4号は「複数のイェルサレム」という特集を組んだ。おりからイスラエルではラビン首相の暗殺とつづく総選挙におけるシモン・ペレス元首相の敗北、アメリカ合衆国ロビーの資金と政治力を背景としたナターニエフ氏の勝利、という局面をむかえていた。当初アブデル・メッデブが当方に所望したのは日本人によるイェルサレム巡礼紀行の仏訳だった。だが徳富蘆花をはじめとして遠藤周作に至るまで、読み返すにつけアラブ圏住民に対する露骨なまでの人種的偏見に染まった文章しか見つからない。わずかに稲垣雄三氏の論評などが異彩を放つものの、六日戦争などあまりに年代が刻印されすぎた時事的発言の色彩が濃く、今や歴史史料としては貴重とはいえ編者の求めるところとは残念乍ら折り合わない。

そうこうしている所でふと目に留まったのが臼杵陽氏の「ハイファ・ビラング？」（『みすず』416号、1995・11月号）だった。そこにはエミール・ハビヴィといったヘブライ語で書くアラブ系の作家、逆にサミュエル・ミハイルのようにアラビア語を日常語としてイラクで育ちながらイスラエルに「追放」されて後ヘブライ語を選んだ作家、さらにはアントン・シャーマスのようにユダヤ系作家のアラビア語作品をヘブライ語に訳した後、今日では北米に離脱している作家といった、アラブ＝イスラエルをめぐる言語活動の錯索を浮かびあがらせる生々しいまでのレポートがあった。日本におけるイスラエル認識もここまでとぎすまされたものになったのか、との感動のもとに話題ゆえの苦痛も感じながら通読し、即座に仏訳を思い立った。

微力を尽くしたつもりではあるが、おぼつかぬ外国語に加えて当方の良くわきまえぬ言語の話題もあり、いくつか意識が誤訳をまねいた点もあって、臼杵さんには大変なご迷惑をおかけしてしまった。それでもフランスの関係者やアラビア語圏の友人のみならず、サミュエル・トリガノといったユダヤ法学者も含めて多くの人々からよい研究を訳した、とあって、当方が、というよりむしろ臼杵氏

の力量にすなおな賛辞のきかれたことが、何よりうれしかった。だが、『みすず』編集部に伺ったところ、そろそろ50年の歴史を誇る同誌に載った日本人の論考で横文字に訳されたのは、この臼杵氏の稿をもって嚆矢とするのだという。文化入超国日本の病理をあらためて納得させられた。そもそも小生の如き門外漢が不自由な外国語でしかない仏語に和文を訳さねばならず、しかもその内容たるやアラビア語圏とヘブライ語圏を自由に流通できる高度の知識人の知見である、というところにも、座視できぬ矛盾があるだろう。

『デダル』5-6号は「ポスト・コロニアル」。2000部売れないとメッデブ夫妻の献身的努力も水泡に帰す。日本からの執筆協力者と定期購読者の出現を心から祈る次第である。

1996年 8月5-6日

*Dedale, Maisonœuvre*

Larose, Paris 75006 FRANCE

### モダニズム/ファシズム/オカルティズム——三題断のおはなし

三宅 昭良

ここ二、三年ほど、寝てもさめても三つの言葉がまるで呪文のように頭のなかを駆けめぐっております。〈モダニズム/ファシズム/オカルティズム〉がそれです。モダニティの問題を考えてゆくと、次のような構図が見えてきます。すなわち、十九世紀後半から二十世紀前半にかけて、一方で科学主義、実証主義、進歩史観、ダーウィニズム、ニヒリズム、懐疑主義などが抬頭します。そしてベンヤミン風というならば、これらがよってたかつて〈生〉に意味を与える〈聖性〉を扼殺しにかかります（どこがベンヤミン風だ?）。しかしその一方では、いわばその〈意味の真空地帯〉に疑似科学宗教というべきオカルティズム——それは合理性を装った反合理にほかならない——が跳梁跋扈しはじめるといふ構図が見えてくるのです。〈モダニズム〉とは、ひとつにはこの合理と反合理のあやうい均衡のうえに広がった文化現象の謂いではないでしょうか。はなしを芸術にかざれば、モダニズム芸術の特徴として、非写実主義としての前衛性を挙げることにおそらく異存はないでしょう。少々乱暴な言い方になりますが、写実主義が三次元世界の法則にのっとる芸術だとすれば、非写実主義は、なにか別の法則、たとえば四次元の法則とか、異界の法則とかをもとにしている芸術ということになります。

国民国家が十九世紀の産物であるのは常識でしょうが、すでに同じ世紀のうちにそれは底辺を削りとられはじめたという考えは、議論の分かれるところかもしれません。ある政治学者によれば、ヨーロッパ型国民国家がそれぞれの個別性を打ち出しながら、それでも安定した関係のなかに身を置いていられたのは、共通の文化的基盤としてキリスト教理念がヨーロッパをおおっていたからでありました。この考えが正しいとすれば、近代合理主義は十九世紀のうちにこの均衡のいしずえを扼殺したのですから、そこにもまた疑似科学宗教が入りこむ真空地帯が存在したことになります。ナショナリズムとオカルティズムが結びつけば、言論と折衝の延長にある〈外交手段としての戦争〉は〈神と正義のための戦争〉に化け、陰謀史観と民族虐殺のテーゼが轟音をたてて作動しはじめると、何の不思議もないわけです。かくしてモダニズムとファシズムをつなぐ鍵はオカルティズムにある、というのがここ最近の愚考であります。そしてこの三題断の焦点にいたるのが、私の研究テーマのひとつ、エズラ・パウンドという詩人です。昨年、『現代思想』六月号にここらあたりの考えを書きましたので、興味をおもちの方はご一読ください。そのうち続編、続々編を書くつもりであります。

総合研究：20世紀アヴァンギャルド諸潮流と  
表象文化の現在——モダンから越境へ

平成10～12年度科学研究費補助金

(基盤研究(A)(1) 課題番号 10301024)

研究成果報告書

---

発行日 平成13年2月28日

編者 大平 具彦・三宅 昭良

編集発行 モダニズム研究会

〒192-0397 八王子市南大沢 1-1

東京都立大学人文学部英文専攻#453

印刷製本 北大印刷